

本日の学び テーマ:「十字架に、神のみ業が現れる」 テキスト:マタイ27章32節-56節

【理解の手がかりとして】

本課の御言葉は、総督ピラトの裁判を終えて、十字架刑に向かわせられる主イエスの姿を書き留めている。しかし、この場面において、イエス様は一切言葉を発しておられない。言葉を発し行動するのは周りの人間たちであり、それらの言葉は悪意と中傷、行動は暴力ばかり。兵士たちはイエス様の着物を剥ぎ取り、兵士用の赤いマントを着せ、茨の冠を被せた。

茨が頭に突き刺さる痛みは想像を絶する。その上、唾を吐きかけられる屈辱、葦の棒で頭をたたき続けられる痛みが加わる。私たちは到底我慢できないだろう。それらの行動と共に浴びせられた悪口、ののしり、挑発、…、言葉は時に暴力よりも人の心をえぐる。イエス様にとって、何よりも痛みを感じたのは、茨のとげよりも、葦の棒で殴られることよりも、人々の心の醜さだったのではないだろうか。

祭司長や律法学者たちの中傷の言葉「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい」(27:42)——しかしイエス様は十字架から降りられなかった。ただただその苦しみをお受けになるばかり。無言のキリスト、そのお姿に、私たちは神の底知れぬ悲しみを感じずにはいられない。

「さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた」(27:45)——一日のうちで、最も明るく輝かしい時間帯に、全地は闇に閉ざされた。神の独り子が十字架につけられ、犯罪人の一人として殺されようとしている。まるで、世界全体が喪に服するように、闇の中に包まれた。かつて預言者アモスはこう預言した。「その日が来ると、と主なる神は言われる。わたしは真昼に太陽を沈ませ、白昼に大地を闇とする」(アモス 8:9)と。このアモスの預言は、「終わりの日」のしるしとして理解されてきた。そしてこの時、イエス様が十字架に架かれた時、まさにそのように白昼に闇が訪れたのである。

天地創造の初めに、神が「光あれ」(創世記 1:3)と言われた。神の力強い創造の言葉によって、闇は退けられ、光が輝いた。その光の中で、すべての存在は良いものとされ、神との正しい関係におかれた。そして人間はその秩序を正しく管理する存在とされた。しかし人間はその役割を忘れ、決して破ってはならない神の言葉に逆らった。それから人間の罪の歴史が始まった。

そしてこの時、御子イエス様の十字架において闇が全地を覆った。まさに世界が神(光)を全く拒絶した結果であった。罪の暗さが人間世界を覆い尽くしたと言ってよいのかもしれない。神の独り子を十字架につけて殺すことにおいて、人間の罪は極まった…。私たち人間の心の深淵。神から離れ、自らを神であるかのように錯覚し、他の命を奪い、蹂躪し、むさぼる我欲。その私たち人間の罪が、罪の暗闇が、十字架につけられた神の独り子イエスを覆い尽くし、飲み込もうとしている、それがこのゴルゴタの丘の光景である。

午後三時ごろ、イエス様は大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」(27:46)。意味は「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(同)である。十字架は「呪い」であった。ガラテヤ書に「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました。『木にかけられた者は、皆呪われている』」(3:13)とある。「呪い」とは、神から完全に捨てられること、救いのないこと。そして十字架はまさにその「呪い」の刑罰であった。

御子イエス様が「呪い」となられる、神から完全に見捨てられる、天に最も近いお方が、天から最も遠くに追いやられる、そんなことがあって良いはずがない。私たちは思う。「わが神、わが神、なぜ独り子をお見捨てになったのですか」と。

イエス様が息を引き取られた瞬間「そのとき」(27:51)、その闇を切り裂くように、大いなる出来事が起る。

- ① **神殿の垂れ幕が、上から下まで真っ二つに裂けた**——この垂れ幕は、神殿の奥の至聖所の入り口にかけられた幕のこと。その奥には、神の臨在を証する契約の箱が安置されていた。そこには、年に一度だけ、しかも大祭司だけが、民の罪の赦しのための祭儀を行うために入ることができた。しかしイエス様の死と共に、この垂れ幕が裂けた。ヘブライ人への手紙はイエス様を「偉大な大祭司」(4:14)と呼んでいる。この偉大な大祭司イエスは、ご自身には罪が無かったにもかかわらず、私たちの罪をその身に背負い、動物の犠牲の血ではなく、ご自身の血によって罪の贖いを成し遂げてくださったのである。
- ② **地震が起こり、岩が裂けた**——岩は確かさの象徴。動くことがないと思われ、崩れることもありえないと思われたものが揺れ動き崩壊した。それは世の終わりを示唆するしるし。御子の死によってこの世の支配は終わりを告げる。あるいはまた、岩のように動くことがないと思われた私たちの頑なな罪、岩のような不信仰も、イエス様の十字架によって打ち砕かれることを告げているのかもしれない。
- ③ **墓が開き、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った**——マタイ福音書は 53 節に主の復活の出来事も付加している。すなわちイエス様が復活された後、その人たちは墓から出て来て、人々の前に現れた、という。イスラエルの民は、エルサレムはかつての族長たちや殉教者たちが特別に復活する場所だと考えていたという。それゆえ、人々はその復活に居合わせるため、自らをここに葬らせた、とも。エゼキエル書 37 章に「枯れた骨の復活」という預言が記されている。「わたしは、お前たちの上に筋をおき、肉を付け、皮膚で覆い、霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。そして、お前たちはわたしが主であることを知るようになる」(37:5)。このエゼキエルの預言に呼応するかのよう、マタイ福音書は、聖なる者たちの復活の後に、人々の信仰の言葉を記している。「百人隊長と一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、『本当に、この人は神の子だった』と言った」(27:54)と。まさに、エゼキエルの預言のごとく、「そして、お前たちはわたしが主であることを知るようになる」が成就する。

「本当に、この人は神の子だった」(27:54)——主なる神様は、この告白へすべての者を招いておられる。

【聖書教育より】

「天変地異や死人の蘇りは、人の力を越えた神の働きの高さ、深さ、復活の命の希望を見ることができるのではないのでしょうか。」(聖書の学び～神の愛の現れるところ)